MYSTERYDOKUSHOANNAIMYSTERYDOKUSHOANNAIMYS

ミステリ読書案内

2019. 12. 30　発行元

第 25 号　伊藤　剛

MYSTERYDOKUSHOANNAIMYSTERYDOKUSHOANNAIMYS

北方謙三・ブラディ・ドールシリーズ

昨年から今年の夏にかけてハルキ文庫から北方謙三の『ブラディ・ドール』シリーズが矢継ぎ早に再刊された。私もここ１年ぐらいの間に集中して読んだ。まとめて読んだ感想を記録しておきたくて、取り上げてみた。

最初の本『さらば、荒野』

１作目に当たる『さらば、荒野』は、１９８２年（昭和５７年）に角川の『野性時代』（下の囲み記事参照）に一挙掲載された後、翌年にカドカワ・ノベルスの１冊として出版された。少し前に本の整理をしていて、この本が私の本棚に残っていたのを発見して、ちょっとびっくり。表紙を見ると、それなりに懐かしい気がする。

当時、私は教職について４～５年目くらいで、仕事に集中で、あまり読めない時期に入っていた。ただ、表紙下部の「本格ハードボイルド」の宣伝文句に惹かれて購入し、まあまあの満足感を持って読了したような記憶が残っている。

その物語の続きがあるなんて思いもしなかった。

『ブラディ・ドール』シリーズ

『さらば、荒野』には、酒場ブラディ・ドールはちょっとだけ登場する。シリーズになるという想像はできなかった。川中、キドニー、藤木などの基本メンバーは登場している。男たちが、自分なりの生き方を求めてぶつかり合うというストーリー。

それから２７年。１８巻目の『されど時は過ぎ行く』が出版されたのが２００９年なので、こんなに長い期間続くとは……。作者の北方自身、そこまで考えていなかったのではないだろうか。

右の表で言うと、１０巻目までが従来の「ブラディ・ドール」シリーズ。１１巻目以降は「約束の街」シリーズという別ものだったのだが、１６巻目の『されど君は微笑む』でＮ市メンバーがＳ市に登場するようになり、両シリーズが合体した。納得。そういう意味では、オールメンバー総出演は目を引く仕掛けである。

《ブラディ・ドール・シリーズ》

１．さらば、荒野
２．碑　名
３．肉　迫
４．秋　霜
５．黒　銹
６．黙　約
７．残　照
８．鳥　影
９．聖　域
１０．ふたたびの、荒野
１１．遠く空は晴れても
１２．たとえ朝が来ても
１３．冬は光に満ちれど
１４．死がやさしく笑っても
１５．いつか海に消え行く
１６．されど君は微笑む
１７．ただ風が冷たい日
１８．されど時は過ぎ行く

実際は２つのシリーズの合体になっている。

シリーズ物として考えると

今回、ハルキ文庫で再刊してくれたので、たまたま短い期間にシリーズを連続して読んだ。そのせいだと思うが、途中で同じパターンのストーリーが繰り返され、やや飽きてしまう時もあった。長いシリーズ物の弊害のようなものである。

そしてまた、「男の誇りをかけた」「命をかけた戦い」みたいな一方的な話の構成で、女の人の意思はどうなるの？とか、なんで警察は登場しないんだ？とかの疑問点が浮かび、違和感が残る時もある。まあ、それはそれで「お約束事」と思えばよいのだが……。

ただ、「男＝ハードボイルド」ではないわけで、「男の意地の物語」としてだけ形作られるのはどうかなと思ってしまう。

北方謙三という作家

実を言うと、私は北方謙三の本はこの『ブラディ・ドール』シリーズ以外ほとんど読んでいない。『水滸伝』『楊令伝』『三国志』『史記』『チンギス記』など、大シリーズが巨大山脈のように聳えているが、今の私には、ミステリ以外の分野に手を広げる余裕はない。

たぶん、北方謙三という作家を理解し、作家像を語るには、歴史物を読む必要があるだろうから、今の私にはちょっと実現不可能なことのように思える。北方謙三の「作家としての評価」は他の方にお願いしたいと考える。

北方謙三の著者近影は、若い時も今もカッコいい。日本のミステリ作家の中では一番のイケメンとして有名なのではないだろうか。

角川書店『野生時代』……ミステリの専門誌ではないが、エンタテインメントの小説関連の月刊雑誌。創刊は１９７４年。週刊誌大（Ｂ５判）の大きな雑誌だった。それなりに厚さもあって持ち運びで苦労した記憶がある。角川映画と結び付いたメディアミックスを特徴としている。森村誠一の『人間の証明』、横溝正史『悪霊島』、赤川次郎『晴れ、ときどき殺人』などが取り上げられ、当時の大きな話題になった。北方謙三もこの流れの中で生まれてきた作家。１９９６年に休刊。２００３年に文芸雑誌のＡ５判サイズに小さくなって復刊。２０１１年には『小説 野生時代』に題名変更。